

発達段階ごとの薬の飲ませ方

子どもに薬を飲ませるときには、年齢に合わせた方法を取ることが大切です。同じ薬でも、1歳のときに飲んでくれた方法で2歳のときにも飲んでくれるとは限りません。

▶乳幼児：0～1歳 内服時間が恐怖の時間にならないように工夫を

まだ吐きやすいため、空腹時がおすすめです。薬を与える前後30分くらいは授乳を控えてみましょう。また、抱き方や態度から不安を感じ取ることもあるので、落ち着いた気持ちで投薬しましょう。

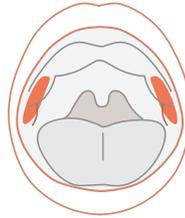
スプーンや哺乳瓶の乳首を使ったり、粉薬を少量の水で練って団子にして、内頬に擦りつけてから、水で流し込む方法もあります。投薬瓶によっては、乳首を直接はめることができる組み合わせもあるため、薬局で相談してください（右写真）。



①スプーン、乳首



②内頬にすりつける



▶幼児前期：1～3歳 簡単にできることを提案し、できたことをほめる

ことばの理解が進むと同時に、徐々に、ごまかす方法から簡単な薬の説明へと移行していきます。薬を飲むことができたならほめてあげましょう。シールなどのごほうびもよいです。薬を混ぜるアイスやゼリーを自分で選ばせたりするのもよいでしょう。

▶幼児後期：3～6歳 目的をもって内服できるように説明する

不快に思う症状を薬で和らげることができる、と理解できることが重要です。病院ごっこなどを行うのも理解の手助けになります。

混ぜるもの・混ぜ方

飲料のほか、ジャムやチョコペースト、プリン、ヨーグルトなどの半固形物、コンデンスミルクやココアパウダー、アイスクリームなどがよく使用されます。

甘みの苦手な子に対しては、海苔の佃煮や味噌、カレーといった塩味のものや辛いものに混ぜてみるのもよいでしょう。アイスクリームのように冷たいものは味覚を鈍らせるためごまかしやすいです。幼児後期くらいからは、完全に混合するのではなく、間に挟んでパクッと食べてもらう方法もよいでしょう（5）薬の飲ませ方①も参照）。

いずれにせよ、保護者自身も試してみると、子どもがいかに頑張っているかがわかります。内服を苦しい時間にならないように取り組みましょう。

（富野浩充）